中国語圏の児童書に関する調査報告

大阪成蹊短期大学
グローバルコミュニケーション学科教授
浅野　法子

はじめに

中国語圏という範疇には、中国語を公用語とする中国大陸や香港、マカオ、台湾のほか、シンガポールやマレーシア等も含まれる。一方で、華僑や華人と称される人々は世界各国に在住し、中国語に限らず現地の言葉で文芸活動を行う場合もある。中国にルーツをもつ人々の文化的営みをとらえようとするとき、多角的な視点を持ち合わせた考察に努めながらも、こぼれ落ちるものはないだろうか。子どもの本を検証する際にも複眼的な見方が欠かせない。

中国の一般文学では、これまでの中国大陸以外の華語使用者による文学のとらえ方に、近年には新たな動きがみられる。アメリカ在住の史書美（史书美・Shi Shumei）や王徳威（王德威・Wang Dewei）らが提唱する「華語語系文学（サイノフォン）」のような、台湾や香港、マカオ、東南アジア等における中国語による文学大系をとらえようとする試みはその一例として挙げられよう。その他にも、英語圏の中国研究における「チャイニーズネス」といった「中国らしさ」の変容に関する議論が文学研究にどのような影響を及ぼすか[1]。中国語圏の児童書を考察するにも、こうした社会風潮や文化潮流を意識した検証が必要である。本稿では、中国語圏における中国語で表現された児童書について、以下に調査結果を報告する。

１．中国語圏の児童文学の概要・歴史、出版状況等

(1)中国大陸の場合

中国大陸における児童文学史を紐解くならば、前近代にも子ども向けの読み物がみられるものの、西洋の児童文学史がアリエスの「児童の世紀」に子どもの「発見」をみると同様、一般的には近代以降とされる。1908 年にグリム童話やアンデルセン童話等の翻案が、商務印書館（商务印书馆）より「童話（童话）」シリーズとして刊行された。例えば、この「童話」という言葉は周作人（周作人・Zhou Zuoren）の指摘するように日本語からの用語とされていることをはじめ、近代の中国児童文学やその周辺は、海外文化を積極的に取り入れながら発展しており、なかには日本文化との交渉による文化的支流もみられる。

1919 年の五四文化運動期前後には民主化の動きとともに、新たな文学が求められ、子ども観の見直しとともに児童文学の萌芽がみられた[2]。この時期に、魯迅（魯迅・Luxun）は「狂人日記（狂人日记）」【Y8-AZ8049 ほか】（【】内は国立国会図書館請求記号、以下同様）にて人が人を「食う」社会を批判しながら「子どもを救え」と叫び、周作人は子どもの独自

性を認めた児童観を唱えている。子どもの存在に着目した魯迅や周作人のほか、鄭振鐸（郑振铎・Zheng Zhenduo）や葉聖陶（叶圣陶・Ye Shengtao）等が中国児童文学の萌芽期を担った。

中国の児童文学は、葉聖陶の「かかし（稲草人）」【Y8-AZ69】が最初とされる。これは、1922 年に鄭振鐸主宰の商務印書館創刊の児童雑誌『児童世界』掲載作である。同誌創刊当時には、1921 年結成の文学研究会メンバーや『小説月報』【Z905-Sy6】投稿作家も作品を投稿しており、おとな向けの一般文学との影響関係もみられる。1922 年には中華書局（中华书局）から児童雑誌『小朋友』【Z32-AC9】も創刊され、1920 年代は児童雑誌の黄金期とされている。こうした児童雑誌は抗日戦争や国内紛争時にも、出版事情が混乱を極めるなかで版地を内陸部や香港へと移転させながら刊行を続けた。

民国期は伝承文学が認知された時期でもある。周作人は日本滞在中に伝承文学にも着目し、帰国後は歌謡研究会の創設にも携わった。各地の昔話やわらべうたの収集も積極的に行っていた。伝承文学が着目されるもうひとつの契機は建国期にある。1950 年には民間文芸研究会が発足し、昔話等の採集が大規模に進められ、『中国民間故事選（中国民间故事选）』【XP-B-19192 ほか】をはじめとした民間文学シリーズが刊行された。

謝冰心（谢冰心・Xie Bingxin）、陳伯吹（陈伯吹・Chen Bochui）、厳文井（严文井・Yan Wenjing）、張天翼（张天翼・Zhang Tianyi）等は子ども読者を意識した創作活動を行い、建国後にも創作を続けた。1949 年中華人民共和国成立以降には、愛国主義感情や社会主義道徳を育む意図が反映されたもの、共産主義的な模範的な子ども像が投影された作品が積極的に作られた。例えば、張天翼の「宝のひょうたん（宝葫芦的秘密）」【Y8-AZ134 ほか】では、願いが叶うひょうたんを手に入れた少年はそのひょうたんを悪用し、怠惰な生活を送るが、やがて模範的な子どもへと改心する物語である。秦兆陽（秦兆阳・Qin Zhaoyang）「ツバメの大旅行（小燕子万里飞行记）」【Y8-AZ5401】のような、親の教えを聞かずに遠回りしながら自立する話も代表作である。その他、特徴としては集団、労働がテーマとなるような話、中国人民解放軍の兵士である雷峰等の模範とされる人物の伝記が挙げられる。1952 年初の児童書出版社である少年児童出版社（少年儿童出版社）が上海に設立され、1956 年には中国共産主義青年団中央委員会直属の中国少年児童出版社（中国少年儿童出版社）が北京に設立された。民国期から諸外国の子どもの読み物を積極的に取り入れていたが、建国前後には、旧帝ロシア、ソ連に学ぶ傾向がみられる。教育活動や児童書に関しても政治的動向に沿う形ですすめられた。後述するが、この間には連環画（连环画）や絵本の前身ともいえる図画故事書（图画故事书）も盛んに刊行されている。

文化大革命を経て、1978 年には児童文学の廬山会議と称される全国少年児童読物創作出版座談会（全国少年儿童读物出版工作座谈会）が開かれ、ここでは新人作家の育成と良書を出版することが確認された。1980 年代は改革開放期にあたり、それまでの童話やプロパガンダ的な政治色の強い作品だけでなく、海外の影響を受けながら大衆向けの作品やファンタジー、絵本の創作の芽生えがみられるようになる。

1980 年代以降の代表的な児童文学作家に曹文軒（曹文轩・Cao Wenxuan）と秦文君（秦文君・Qin Wenjun）がいる。曹文軒は北京在住、秦文君は上海在住ということから、中国児童文学界では「南秦北曹（北の曹文軒、南の秦文君）」と称されるほど、両氏の作品には定評がある。曹文軒は自身の幼少期に材を得た農村の少年を描き、秦文君は現代の子どもたちの日常を描いた。その他、動物ものを執筆する沈石渓（沈石溪・Shen Shixi）、少女に着目する陳丹燕（陈丹燕・Chen Danyan）等がいる。

中国の代表的な作家には、民国期以降の作家たちを世代別の 5 期に分ける見方もある。第一世代作家には民国期に執筆を始めた葉聖陶、謝氷心、茅盾（茅盾・Maodun）、鄭振鐸、趙景深（赵景深・Zhao Jingshen）等。第二世代作家には 1930 年代から 1960 年代といった革命期の張天翼、陳伯吹、厳文井、金近（金近・Jin Jin）、賀宜（贺宜・He Yi）等。1950 年代から文化大革命以降の第三世代作家には葉君健（叶君健・Ye Junjian）、魯兵（鲁兵・Lubing）、聖野（圣野・Shengye）、郭風（郭风・Guo Feng）、任大星（任大星・Ren Daxing）、任大霖（任大霖・Ren Dalin）、任溶溶（任溶溶・Ren Rongrong）、洪汎濤（洪汛涛・Hong Xuntao）、葛翠琳（葛翠琳・Ge Cuilin）、柯岩（柯岩・Keyan）、徐光耀（徐光耀・Xu Guangyao）、蕭平（萧平・Xiaoping）、邱勲（邱勋・Qiu Xun）、金波（金波・Jinbo）、孫幼軍（孙幼军・Sun Youjun）等。第四世代作家には、曹文軒、秦文君、董宏猷（董宏猷・Dong Hongyou）、班馬（班马・Banma）、沈石渓、鄭春華（郑春华・Zheng Chunhua）等。第五世代作家には、楊紅桜（杨红樱・Yang Hongying）、湯素蘭（汤素兰・Tang Sulan）、徐魯（徐鲁・Xu Lu）、薛濤（薛涛・Xue Tao）、彭学軍（彭学军・Peng Xuejun）、楊鵬（杨鹏・Yang Peng）、殷健霊（殷健灵・Yin Jianling）、李東華（李东华・Li Donghua）、汪玥含（汪玥含・Wang Yuehan）、韓青辰（韩青辰・Han Qingchen）、張潔（张洁・Zhang Jie）等がいる（王泉根 2016）[3]。

中国大陸では師範大学に所属する研究者によって児童文学研究が盛んに行われている。蒋風（蒋风・Jiang Feng）、王泉根（王泉根・Wang Quangen）、朱自強（朱自强・Zhu Ziqiang）、方衛平（方卫平・Fang Weiping）等は国際会議での研究発表も積極的に参加し、国内外での評価も高い。蒋風と朱自強は国際グリム賞受賞者である。

(2)台湾の場合

台湾の児童文学を考えるとき、中国大陸の影響や台湾独自の華語文学をとらえる必要がある。ただ、先住民族や日本統治期の影響がみられるものもあり、複数の言語で語られるものへの目配りも必要であろう。また、1990 年代以降に中国大陸や東南アジアから移民として在住する人たちの母語での表現活動もみられ、その中国語訳つきのものなどを含めると多様な傾向がみられる。

台湾の児童文学史は、時代区分ごとに語られることが多い。例えば、第二次世界大戦以降である 1945 年から 1963 年までを萌芽期、1964 年から 1979 年までを成長期、1980 年から 1987 年までを発展期、1988 年以降の多元共生期といった 4 区分に分けるものがある（林文宝 2001）[4]。戦後の子どもの読み物といえば民話や童話が主流であったが、1986 年の戒厳令

解除前後には児童雑誌の黄金期を迎えた。以降、政治の自由化、民主化が進むとともに海外文化を積極的に取り入れ、子どもの本の翻訳出版も盛んとなる。

戦前の状況としては、 游珮芸『植民地台湾の児童文化』【KG411-G34】と中島利郎『日本統治期台湾文学研究　台湾の児童文学と日本人』【KK335-L1】に詳しい。日本統治期には西岡英夫や吉川精馬、西川満、石田道雄等の日本語による作品がある。1920 年代後半には中国大陸の五四文化運動の影響を受けた。戦後は児童書局（兒童書局）や商務印書館といった中国大陸の出版社が分館として出版活動を行っていた。また、台湾独自のものに、東方出版社の書籍「東方少年文庫」や雑誌「東方少年」、国語日報の新聞「国語日報・児童版」があるほか、台中市政府教育科発行「台湾児童月刊」や台湾省教育庁の資金援助で刊行された「小学生雑誌」「小学生画刊」等が刊行された。

1964 年には、台湾省教育庁設立の児童読物編集グループ（兒童讀物編輯小組）では、林海音（林海音・Lin Haiyin）、潘人木（潘人木・Pan Renmu）、林良（林良・Lin Liang）、厳友梅（嚴友梅・Yan Youmei）、林鐘隆（林鐘隆・Lin Zhonglong）等といった作家たちが中心となり活動を始める。これは、国連児童基金（UNICEF）からの資金援助があり実現したものだった。1949 年からの戒厳令時代において、海外の情報が入手しにくい状態にあったため、こうしたサポート体制は台湾の児童文学や絵本の発展に大きく影響した。「中華児童叢書」【Y17-AZ7743 ほか】をはじめ「中華幼児叢書」「中華児童百科叢書」等にて台湾独自の児童読物が模索された。

1987 年、民主化を求める動きによって 38 年にわたる戒厳令が解除され、言論統制からも解き放たれた。政権交代にまつわる政治的要因が文学にも影響を与え、児童文学にも「台湾らしさ」を求める動きがみられるようになる。趙天儀（趙天儀・Zhao Tianyi）、林煥彰（林煥彰・Lin Huanzhang）、洪文瓊（洪文瓊・Hong Wenqiong）、桂文亜（桂文亞・Gui Wenya）等が創作、研究、編集出版等の立場から台湾児童文学の発展を支えた。作家では小説家であり、童話作家でもある鄭清文（鄭清文・Zheng Qingwen）のほか、「台湾少年小説」を手掛けた李潼（李潼・Litong）、詩や童話、幼年文学を中心に創作、翻訳に携わる方素珍（方素珍・Fang Suzhen）等がいる。その他、台湾の児童文学研究者には林文宝（林文寶・Lin Wenbao）、邱各容（邱各容・Qiu Gerong）等がおり、国立台東大学児童文学研究所（國立臺東大學兒童文學研究所[5]）といった研究機関がある。

(3)香港の場合

香港の文化的土壌は中国大陸や海外の影響を強く受けている。1842 年アヘン戦争後の南京条約を締結した結果、香港はイギリス領となり、太平洋戦争にて日本に占領されるが、1945 年には再びイギリスの植民地となり、1997 年の中国返還までは「一国二制度」がとられた。こうした歴史的背景からも、香港の子どもの読み物は、独自性を模索しながら発展した系譜がみられる。

香港の児童文学の起源は、中国大陸の五四文化運動の機運を受け、新聞や雑誌に掲載され

た子ども向けの読み物にみられる。1941 年 6 月に創刊された『新児童』は、曽昭森（曾昭森・Zeng Zhaosen）主宰、黄慶雲（黄慶雲・Huang Qingyun）編集によるもので、海外作品に影響を受けながらも香港独自の作品が収録された児童雑誌である。1947 年に中華全国文芸協会香港分会が設立され、児童文学研究グループが組まれた。香港も当初は児童雑誌や新聞の児童向け特集に児童文学作品が収録された。例えば、1921 年創刊の「華僑日報」には戦後に連載「児童週刊」と称するページが作られたことをはじめ、「星島日報」「文匯報」「大公報」等にも同じく子ども読者欄がみられる。児童雑誌や新聞を通して文芸活動へと発展させた。

ラジオ番組「香港麗的呼声」の司会を担当した劉恵瓊（劉惠瓊・Liu Huiqiong）は、1960 年創刊の『児童報』に掲載したものをはじめ、香港らしさを求めた作品を発表した。何紫（何紫・Hezi）、阿濃（阿濃・Anong）等も同誌に子ども向けの作品を掲載し、童話や寓話、児童劇等が収録された。現代の児童文学作家には、周密密（周密密・Zhou Mimi）、金力明（金力明・Jin Liming）、陳文威（陳文威・Chen Wenwei）、潘金英（潘金英・Pan Jinying）、潘明珠（潘明珠・Pan Mingzhu）等がいる。リアリズム作品が多く、香港の児童文学は中国大陸や西洋の影響を受けながら、独自性を求めて発展してきた。研究を手掛ける作家もいるが、霍玉英（霍玉英・Huo Yuying）の一連の研究成果が評価されている。

(4)シンガポール・マレーシアの場合

「新馬華児童文学」と称されるシンガポールやマレーシアの児童文学は、アジアにおけるディアスポラによる文学を確立した事例として確認できるが、その研究はあまり進んでいない。中国語学習の一環として児童文学が注目されており、ルーツ文学としてアイデンティティの葛藤がテーマとなっている作品も多い。

1950 年代以降には年紅（年红・Nian Hong）、馬漢（马汉・Ma Han）、謝倬栄（谢倬荣・Xie Zhuorong）といった作家たちがいる。1969 年には年紅を中心に南馬文芸研究会（南马文艺研究会）を設立。主な作家として、馬漢、夢平（梦平・Mengping）、梁志慶（梁志庆・Liang Zhiqing）、爱薇（爱薇・Aiwei）、方理（方理・Fang Li）、艾斯（艾斯・Aisi）、碧枝（碧枝・Bi Zhi）等が挙げられる。1991 年より隔年開催の「星洲日報」主宰花踪文学賞（花踪文学奖）には、第 5 回から第 9 回までには児童文学の部門賞があった [6]。主な出版社に許友彬（许友彬・Xu Youbin）が設立した紅蜻蜓出版社（红蜻蜓出版社）がある [7]。

２．中国語圏の絵本

英語の“picture-book” 、日本語の「絵本」に相当する中国語は、「図画書（图画书）」または「絵本」とされる。「図画書」は中国大陸よりも先に絵本文化が根付いた台湾経由の名称ともされ、「絵本」は日本語に由来する。物語絵本を主とするイギリス、イラストレータの活躍で発達したアメリカ、コミュニケーションツールとして発展した日本、翻訳文化が盛んななかで確立させた台湾など、国や地域によって「絵本」の発展過程は異なり、「絵本」と

いう言葉の範疇も異なりをみせている。

では、中国の「図画書」や「絵本」の指すもとは何か。中国民国期の上海では「連環画」を「図画書」とも称した。また、前述の児童雑誌『児童世界』には、海外の作品が数多く収録されたなかで、日本での留学経験がある許敦谷（许敦谷・Xu Dungu）等の画家が芸術性の高い児童出版美術を手掛けている。同誌には「図画故事」とジャンル分けされる一連の絵物語が掲載されており、以降盛んに刊行される「図画故事書」と呼ばれる絵本の起源を想起させるものである[8]。中国語圏における絵本の概念に迫るには、絵本前史を追うことが有効であるとともに、中国大陸に先駆けて絵本文化を確立させた台湾や、海外の絵本との影響関係を考察する必要がある。

そのほかにも、児童書や児童雑誌、連環画、図画故事書の出版が盛んになり、画家たちの活躍の場が広がった。豊子愷（丰子恺・Feng Zikai）や張楽平（张乐平・Zhang Leping）の漫画や、児童映画やアニメーションが製作された。なかでも上海美術電影制片廠（上海美术电影制片厂）のアニメーションは、連環画や図画故事書として刊行される作品も多かった。これらの視覚メディアには、海外文化との影響関係だけでなく、構図取りや場面割り、絵画の技法において中国独自の表現も確認できる。現在の中国の絵本表現には、こうした民国期以降から 1980 年代までの児童雑誌や図画故事書によくみられ、欧米諸国や日本、台湾の絵本とも異なる独自の発展過程が確認できる。

絵本作家には、野間絵本原画コンクール入賞者に張世明（张世明・Zhang Shiming）や于大武（于大武・Yu Dawu）がいる。日本での留学経験のある彭懿（彭懿・Peng Yi）は、中国大陸では新しい概念であったファンタジーや絵本を取り入れ、それらの理論の普及や創作に努めた。また、2018 年には国際アンデルセン賞画家賞のショートリストに、熊亮（熊亮・Xiong Liang）が中国の絵本作家として初めての入賞を果たしている。近年、中国絵本は国際的評価を受け、その動向が注目されている。

香港や台湾の絵本は、中国大陸よりも先駆けて発展してきた。例えば、香港のカラー版の絵雑誌「児童楽園」（1953-）には香港の多文化社会が表現されているような、さまざまなイメージが盛り込まれた。また、台湾の絵本は代表的な絵本作家として鄭明進（鄭明進・Zheng Mingjin）、趙国宗（趙國宗・Zhao Guozong）、曹俊彦（曹俊彦・Cao Junyan）のほか、陳致元（陳致元・Chen Zhiyuan）、賴馬（賴馬・Laima）がいる。おとな向けの作品ともされるが幾米（幾米・Jimi）の作品は国際的にも評価が高い[9]。

３．児童書とその周辺

児童文学史や絵本史を考察する際、日本や諸外国のそれとは異なる文化継承の文脈を解明することに意味がある。児童文学は文学や社会学、教育学、民俗学、芸術分野等といった、学際的な研究へと発展させることも可能である。とりわけ中国では児童文学を教育の一環で扱うことも多いため、読書環境や教育関連に注視する必要がある。

(1)読書環境

中国大陸では目覚ましい経済成長に伴い、児童書市場が急成長を遂げており、ネット書店だけでなく、実店舗型の書店の新規参入もみられる。近年には新規オープンする大型書店があるほか、全国展開する国営の新華書店にもリニューアルオープンする店舗が多数みられる。どれも児童書の売り場面積をしっかりと確保しており、そのなかでも絵本売り場が充実している。その他、「西遊記」や「三国志」、「聊斎志異」等をはじめとする古典文学や、魯迅をはじめとする民国期以降の作家の作品、1980 年代以降の代表的な作家等の作品が並んでいる。

子どもたちが本と出合う場には、学校図書館や教室といった学校現場以外にも、公共図書館や書店等がある。2006 年に始まった読書活動に注視する政策「全民閲読」は、子どもだけでなく、成人の読書推進活動も視野に入れた全国展開の活動である。2008 年に中国国家図書館新館が開館し、2010 年には中国国家図書館少年児童館（国家图书馆少年儿童馆 [10]）が開館した。一方で、その前身が民国時期にある上海少年児童図書館（上海少年儿童图书馆 [11]）のような、長年のノウハウを生かしながら常に新たな児童サービスを探求してきた図書館もある [12]。中国ではこうした分野においても海外の情報を貪欲に吸収しながら独自のサービスを開拓し、先進的な取り組みも積極的に実施している。

子どもの読書推進活動に関しては、民間団体の取り組みも盛んにおこなわれている。例えば、新閲読研究所は（新阅读研究所）は 2011 年に「中国小学生基礎閲読書目」（ブックリスト No.33）を公表後、数年ごとに修正を加えてきた [13]。また、児童書と読者をむすぶ啓蒙的な活動をする団体として、読書倶楽部（读书俱乐部）や絵本館（绘本馆）による活動がある [14]。こうした民間団体は、児童書のネットショップを運営しながら児童書に関する啓蒙活動を行っている。絵本館とは、絵本を中心とする児童書の販売や貸出を主な活動とする団体で、加盟店を増やしながら運営しているところが多い。絵本メディアがここ数年で急速に市場に出回るようになった要因には、こうした民間団体に支持されたことによるものが大きい。

(2)国語教育と児童文学

中国の児童文学は、例えば国語教育の副読本として取り扱われる等、教育と密接に関わりながら発展してきた。児童書や雑誌が課題読み物として指定されるケースもある。また、子どもの読み物の絵は「看图话说（絵をみて語る）」教材としてとらえられてきた経緯もあり、現在絵本も教育現場で活用されることが多い。絵本は中国では今世紀に入り普及してきたものであるため、教育熱心な親たちであっても絵本の扱いがわからない場合が多いと聞く。前述のネットショップや絵本館は、そうした親世代を対象として、絵本の普及に関する取り組みをビジネス化し、社会に向けてさまざまなサービスを提供している。ポプラ社のグループ会社である北京蒲蒲蘭文化発展有限会社（北京蒲蒲兰文化发展有限公司）は、こうした業務も展開する一企業であり、中国大陸における近年の絵本ブームの立役者でもある。

中国は建国以降、ソ連や日本等の海外の教育課程やカリキュラムを参考にしながら教育課程の改良を進めてきた。1986 年に義務教育法が制定され、教育課程は 1978 年制定の「教

育体綱」から 2001 年実施の「課程標準（実験稿）」及び現在の「課程標準」へと改訂された。受験を意識した詰込み式の「応試教育」から、それぞれの人間性を育むことを目的とする「素質教育」へと移行するなか、中国では 2019 年 9 月より小中学校の教科書の一部が検定制から国定本へと切り替えられ、日本の国語科に相当する「語文」の教科書はその対象となった。

現代中国の語文教科書の中には、古典文学作品等伝統的な教材の他に、中国の国家指導者や革命的英雄の紹介文、中国の文化や文学、歴史、地理のほか、海外の文化や政治、科学知識に関する説明文が収録されている。語文教科書を通して一定の抑えるべき知識や教養が示されている。現行教科書において、中国の文学や児童文学の採用数の多い作家に葉聖陶（五編）、老舎（老舎・Laoshe）（四編）、三編収録の冰心、金波、巴金（巴金・Bajin）、張秋生がいる。詩と散文の両方を創作する国内の作家が上位にあがる傾向がみられる。海外作品としてはアンデルセン、トルストイ、イソップの作品が二編ずつ収録されるほかにも、世界各国・地域の作品も含まれている。日本の作品は金子みすゞ「次からつぎへ（一个接一个）」（一年下）と清少納言「枕草子（四季之美）」（五年上）が採用された。

中国大陸の現行の語文教科書は、日本や韓国、台湾といった東アジア地域のものと比較しても収録作品が多いことが特徴として挙げられる[15]。こうした教材がどのように享受されているかについても気になるところである。子ども読者は教科書を通して児童文学の世界へと繋がることもあるため、教科書掲載作の動向が把握できる関連資料についても探していきたい。

４．国際子ども図書館の蔵書評価

中国語圏の児童書全般の蔵書状況に関しては、かねてより充実した蔵書構築がなされている印象をもっていた。今回の調査では、児童文学作品をはじめ、人文学、社会科学、自然科学関連への目配りも感じられた。また、受賞作であれば漫画も収集範囲にあり、今世紀以降に活発となった絵本出版の動向もおさえていることがわかる。なかでも、近年には中国大陸にて日本語オリジナルの絵本がまとめて出版されたが、これらも網羅されている。研究関連の書籍が手薄であるとのことだったが、主要なものは所蔵されている。とりわけ 1990 年代以降に中国大陸と台湾で出版された児童書関連は充実しており、これらを研究調査する利用者のニーズをある程度満たすことが可能であろう。

中国大陸の資料には、国立国会図書館のコレクションである上海新華書店旧蔵書の一部といった貴重な資料もある。関西館所蔵のうち、児童書関連の資料が国際子ども図書館に移管されたものである。整理中のものもあるが、建国当時の児童書も多く、出版状況を知る上で大変貴重なものである。台湾の資料については現代の作品は所蔵されているものの、日本国内で希少な戦後から 1980 年代ごろまでの資料の収集が望まれる。

一方、香港やシンガポール、マレーシアの児童書について、中国語で出版された児童書関連の情報収集は難しい。まずは手がかりとして、中国大陸で出版された「華文児童文学」と称されるものや、代表的な作家の作品が収録された書籍をリストに挙げた。既に収集範囲で

ある児童文学賞については継続収集されると良い。とりわけ中国大陸と台湾に関しては、歴代受賞者の代表作もほぼ蔵書とされており、これらは中国語圏の現況が俯瞰できる貴重な資料となる。参考としたサイトは以下のとおりである。

(1)主な児童文学賞受賞作に関する情報サイト（ウェブサイトの最終アクセス日：2023 年 2 月 28 日）

・全国優秀児童文学賞（全国优秀儿童文学奖）
中国作家協会主催の児童文学賞。1980 年創設、3 年に 1 度開催。小説、詩歌、童話、散文、SF 文学、幼年文学、若手作者短編佳作賞の部門に分かれている。
历届全国优秀儿童文学奖获奖作品一览--文学奖项--中国作家网 (chinawriter.com.cn)
http://www.chinawriter.com.cn/n1/2018/0516/c405647-29994852.html

・信誼絵本賞（信谊图画书奖）
中国の南京信誼児童文化発展有限会社（南京信谊儿童文化发展有限公司）主催の絵本賞。2009 年に創設。隔年開催。
信谊图画书奖 南京信谊 (hsin-yi.org.cn)
http://www.hsin-yi.org.cn/Tuhuajiang/djhg2.html

・豊子愷絵本賞（豊子愷兒童圖畫書獎）
香港の陳一心家族慈善基金が 2008 年に創設。隔年開催。中国、香港、台湾等の中国語で出版された創作絵本から選出。
https://fengzikaibookaward.org/hk/

・信誼幼児文学賞（信誼幼兒文學獎）
台湾の児童書出版社である台湾信誼基金会が 1987 年に創設。8 歳以下を対象とした物語、知識、詩歌等の中国語による創作作品を選出。毎年実施。
信誼幼兒文學獎 (kimy.com.tw)
https://www.kimy.com.tw/ChildrenLiteratureAward/pag-4.html

・国語日報児童文学牧笛賞（國語日報兒童文學牧笛獎）
台湾の財団法人国語日報社「国語日報」が 1995 年に創設。8 歳から 12 歳を対象とした中国語で創作された未発表作品を公募する。毎年実施。
https://mudi.mdnkids.com/

・金鼎賞（金鼎獎）
台湾政府文化部主催。毎年実施。1976 年創設。特別貢献賞（特別貢獻獎）のほか、雑誌（雜

誌)、図書（圖書)、デジタル出版（數位出版)、政府出版（政府出版品）の 4 部門 21 項目の賞がある。うち、図書類に児童及少年図書賞（兒童及少年圖書獎）がある。
https://gta.moc.gov.tw/home/zh-tw

・呉濁流文学賞（吳濁流文學獎）
台湾新竹県政府文化局（新竹縣政府文化局）主催の文芸賞。2020 年より児童文学も対象となる。
【2022 年吳濁流文學獎】得獎名單 – 新竹縣政府文化局 (hchcc.gov.tw)
https://www.hchcc.gov.tw/Tw/News/ActDetail?filter=e2ce565c-7042-466e-9b77-bb81937b8cf9&id=a8d1cd19-fafc-4a90-9e61-9e24ffbfdc3d
【2021 年吳濁流文學獎】得獎名單 – 新竹縣政府文化局 (hchcc.gov.tw)
https://www.hchcc.gov.tw/Tw/Common/BulletinDetail?filter=c1473333-5922-4519-a15d-3a7bc20873e9&id=6e276b7a-e8cb-41c7-a463-16f4fe42a010

・香港図画書創作賞（香港圖畫書創作獎）
香港児童文学文化協会（香港兒童文學文化協會）主催。3 歳から 12 歳を対象とした中国語の創作作品を対象に選出。
http://clca.org.hk/awards1.html

(2)選書のための情報
中国大陸
・孔夫子古書サイト（孔夫子旧书网）
中国の古書店が加盟する古書サイト
https://www.kongfz.com/

・新閲読研究所（新阅读研究所）
2010 年に北京に設立した読書推進活動を行う民間の公益事業団体
https://m.weibo.cn/u/2192236757

台湾
・良書を読みましょう（好書大家讀）
台北市立図書館（臺北市立圖書館)、新北市立図書館（新北市立圖書館)、国語日報社（國語日報社）が作成する推薦図書リスト
臺北市立圖書館-得獎好書-好書大家讀 (gov.taipei)
https://tpml.gov.taipei/News_Content.aspx?n=E5E37C9048A83EB3&sms=7D4B7120B494353E&s=C15B641097D9FEB8

参考文献：

『中国児童文学』中国児童文学研究会　第 1 号-第 27 号【Z12-508】
『虹の図書室』日中児童文学美術交流センター　第 1 巻第 1 号−第 20 号、第 2 巻第 1 巻−第 20 号【Z71-C675】
『論文集「台湾の絵本」・シンポジウム報告集「台湾と日本の絵本」』大阪国際児童文学館 2007 年【UG71-H132】
『論文集「中国の絵本」・シンポジウム報告集「中国と日本の絵本」』大阪国際児童文学館 2010 年【UG71-J47】
黄慶雲、周蜜蜜等主編『香港文学大系 1950－1969 児童文学巻』商務印書館（香港）2021 年（ブックリスト No.34）
霍玉英主編『香港文学大系 1919-1949 児童文学巻』商務印書館（香港）2014 年【YZ-AZ577】
林文宝、邱各容著『台湾児童文学史』萬巻楼図書 2018 年【YZ-AZ670】

---

[1] 中国現代文学研究者懇話会では、2019 年度には「マレーシア華人文学とサイノフォン（華夷風）」、2022 年度には「『らしさ』を超えて―中華圏の文学芸術にまつわる国籍・ジェンダー・言語・文化―」と題した研究会が開催された。

- JCAS:地域研究コンソーシアム＞地域研究イベント情報＞一般向け講演会＞マレーシア華人文学とサイノフォン（華夷風）　＜http:/www.jcas.jp/event/2019/10/post_441.html＞
- JCAS:地域研究コンソーシアム＞地域研究イベント情報＞一般向け講演会＞国研プロジェクト・公開講演会「『らしさ』を越えて ―中華圏の文学芸術にまつわる国籍・ジェンダー・言語・文化―」　＜http://www.jcas.jp/event/2022/09/post_456.html＞

[2] 1919 年 1 月のパリ講和条約を受け、同年 5 月 4 日に起きた中国の反日、反帝国主義運動。帝国主義を打破しようとするような世界的ナショナリズムの高揚がみられるなかで、こうした中国の民衆運動の影響は中国各地へと広がりをみせた。

[3] 王泉根　百年中国儿童文学的三次转型与五代作家 | 王泉根 (qq.com)　2016 年　＜https://mp.weixin.qq.com/s?__biz=MzAwNjM2MzEwNw==&mid=2650735971&idx=1&sn=d21639c5a29b627dbafaace321adc462&chksm=830527efb472aef9715d908afedeb133ab8dc4fd91ff2faa1178083f6b521774627b250bfae5&scene=27＞

[4] 林文宝、邱各容『台湾児童文学史』萬巻楼図書股份有限公司 2018 年　16 頁

[5] ＜https://ice.nttu.edu.tw/＞

[6] 花踪（sinchew.com.my）＜https://huazong.sinchew.com.my/index.php＞

[7] 红蜻蜓出版社 Odonata Publishing < https://odonata.com.my/ >

[8] 浅野法子「鄭振鐸主編時期の中国児童雑誌『児童世界』一考察――編集方針と誌面の変遷を中心に」三宅興子先生退職記念論文集刊行会『児童文学研究を拓く』(翰林書房 2007 年)収録【KE177-H38】

[9] JSPS 科研費 19K00384 基盤研究(C)「中国絵本史の構築―表現検証と環境調査の視座から」(研究代表者：浅野法子)

[10] ＜ http://kids.nlc.cn/ ＞

[11] ＜ https://www.sst.cn/ ＞

[12] 国際子ども図書館主催講演会「中国の子どもの読書と図書館の現在」上海少年児童図書館館長蘆秋勤氏講演（2019 年 3 月 25 日）にて、上海少年児童図書館の活動報告があった。読書会や朗読会やクラフト等に留まらず、ＡＲやドローン、プログラミングを取り入れたイベントを図書館サービスとして実施しているとのことだった。 ＜ https://www.kodomo.go.jp/event/event/event2019-04.html ＞

[13] 2010 年 10 月、朱永新（中国民主促進会副主席、第十三回中国人民政治協商会議全国委員会常務委員兼副秘書長）創設の公益研究機構。創設時栄誉所長に朱永新、所長に王林（人民教育出版社編集者、読書推進活動・児童文学研究者）が担当。児童教育学、児童心理学、児童文学等の領域を専門とする研究者や小学校教員の団体であり、共同研究成果として読書リストの作成や、読書教育、読書活動等の普及活動を行っている。「中国人閲読書目」シリーズ（中国人民大学出版社）（ブックリスト No.35-40）等の研究成果がある。

[14] たとえば、北京紅泥巴文化発展有限公司による紅泥巴読書倶楽部では、児童書のネットショップを運営しながら、児童書の啓蒙活動を積極的に行っている。 ＜ https://www.hongniba.com.cn/bookclub/ ＞

[15] JSPS 科研費 20K00522 基盤研究(C)「東アジア児童文学史の構築をめざして―出発としての国語教科書掲載作の検証」(研究代表者：成實朋子)